

葛飾と

江戸・東京



▲ 寅さんのふるさと、柴又帝釈天参道

本学は、その名に「東京」として知られている。戦争を冠している。だが、果たしてそれは正しいのか。都心からのアクセスの悪さ、特に千代田線の「綾瀬止まり」に苦しんでいる本学が「鷹狩」とは、鷹狩とは、飼いな生ならば、誰もが抱く疑問ではないだろうか。葛飾の歴史から考えてみよう。

突然だが、皆さんの食卓に小松菜を使った料理は並ぶだろうか。実は、この「小松菜」の名は、8代将軍・徳川吉宗によってつけられたのだ。

吉宗は「暴れん坊将軍」

訪れる場合には大回りとなつてしまうので、利用する江戸市民は少なかった。ただ、彼のような公用通行者の場合は街道筋の宿場で人馬を徴発できるが、勝手にルートを選ぶことはできなかったのだ。

鷹場に設定された村々にも、様々な制約や義務があった。鷹場では、鷹狩の際の獲物となる鳥類や小動物、そしてその餌となる魚類の殺生も原則禁止されていた。また、鷹場の破損した道路や橋の修理も行ったのだ。こうした負担に加え、千住宿、新宿などの宿場には、周辺の村々が、助郷制度によって人馬の提供も行ったのだ。

ただ、大都市江戸との関わりは悪いことばかりではない。葛飾を、江戸の近郊農村として発達させたのだ。

「金肥」という言葉をご存じだろうか。中学校以来、社会科目から遠ざかっていて忘れてしまったという人が多いかもしれない。農家がお金を出して購入する肥料のことだ。江戸時代、葛飾の富裕な農民は発達した水運を利用して江戸から人糞・し尿を持ち帰り、「下肥」と呼ばれる肥料とした。糞尿は水によく溶け、すぐに栄養分として植物に吸収されるので、とても重宝された。下肥を運ぶ船が一艘もつていることは一町の土地を持つていることに匹敵する財産である、という意味で、「船一艘は一町株」と言われたほどだ。

江戸市中の長屋の収入の大部分は、糞尿を汲み取る権利の売却益だったともされる。下肥の利用は戦後、化学肥料に代わるまで続く。こうした下肥に支えられ、江戸中期には葛飾から多くの新鮮な野菜が出荷されるようになった。金町・

水元・新宿地区一帯で生産されたネギが、出荷された青物市のあつた千住にちなんで「千住ネギ」と呼ばれるようになったのもこの時代である。現在、金町地区の葛西神社には、千住ネギ発祥の地であることをしめす由来板がある。

江戸と葛飾の間の物流を担ったのは、船だった。船は、川も通る。北千住から地下鉄千代田線・常磐線を利用して金町駅へ向かうと、多くの橋梁で川を越えていく。この、山の手線から東の地域は「東京低地」と呼ばれており、大小の河川が東京湾に注いでいる。ちなみに、綾瀬駅の「綾瀬」は「きれいな小川」の意だ。金町駅からキャンパスへ向かって歩いていくと、海拔0〜1m地帯であることを示すピラが電柱に貼られているの気が付くだろう。古くから水運を利用してきた地域だが、江戸時代になって大いに発展する。参勤交代の制は、大名に消費を強い、その財力を削るばかりではない。参勤し、江戸に詰められた武士たちによって、宿場町や江戸の町が一大消費地となったのである。天領や江戸詰めの大名家から年貢米が運ばれてくる定期航路も整備されたのだ。

こうした水運を整備したのは、関東郡代、伊奈氏だった。その屋敷は「小菅御殿」と呼ばれ、跡地には小菅監

獄（現在の東京拘留所）が設置される。伊奈氏は数代にわたって江戸の治水事業を任されていた。それまで東京湾に注いでいた利根川の流れを、東に変えてしまおうという大工事だった。おとうという大工事だった。川を蛇行させて流れを緩やかにしたり、遊水池を設けたりして、できる限り自然に逆らわずに行つた。



▲ 柴又駅とフーテンの寅像

一般科目とは何か

大正・昭和期を通じて、東京は変貌を遂げた。関東大震災・第二次世界大戦を経て、農村であった葛飾には多くの人々が移り住んだ。広い土地があり、豊富な工場用水にも恵まれていたので、工場もつくられた。忙しく働く家族の食卓を惣菜屋が支える。「男はつらいよ」で描かれた下町は、この時期に生まれた。耕地整理や区画整理によって、「寅さん」の故郷・柴又でも宅地化が進んでいた。かつて農村であった葛飾だが、京成線に乗り、行商人が野菜や海産物を担いでやってくるようになっていく。本学もまた、この変容していく町の歴史となつていくことだろう。

▲ にいじゅくみらい公園に残る「地球釜」 三菱製紙中川工場に使われていた。

教養主義が衰退して約40年、大学設置基準が緩和されて25年、社会は大きく変化し、人の生き方が多様化した今、私たち学生は大学で何をどう学ぶべきなのか。

本学では一般科目は主に1、2年生が受けることが多い講義である。これは他大学でいう一般教養の講義にあたる。一般教養と一般教養の講義は一般教育と呼ばれ講義はどの大学・短大にもある。この一般教養の講義は学生に教養を高めてもらう事を一つの目的にしている。

そもそも教養とは何だろうか。教養教育は戦前の高等教育機関である旧制高校でも行われていた。しかし、この教養教育はエリート的な教養であり、現在とは異なる。教養教育は時代と共に変化してきた。現在の教養教育の目標には大きく2つある。1つは自らの持つ専門を発展させることだ。例えば文化人類学で様々な文化がある事を知れば将来、製品設計の仕事に就いた時に様々な文化に配慮した設計が可能になるかもしれない。もう一つは市民社会を生き抜くことだ。専門家のいえ市民として生活する時間のほうが多い。市民社会では競争が生み出す対立や差別・貧困・抑圧・迫害などの社会問題が多く存在する。それを考え、気づき、その解決と是正に向けて多様な取り組みをするのが市民社会を生きるための教養である。

昨今ネットの発達などで多くの集団が認識されるようになった。例えば、精神障がい者、生活保護受給者、トランスジェンダーなどである。多様な集団が錯綜するなかで当然、対立・抑圧・差別などが起こる。専門知識を踏襲しつつ市民社会を生きるための教養が必要になってくるのである。近年欧米諸国を中心に日本でも市民社会を生きるための教育が行われてきている。本学では市民社会を生きるための教養はどの程度学ぶことができるのか。アメリカはリベラル

アーツの伝統があり、ハーバード大学、コロンビア大学など多くの大学は2年生まで一般教育を中心に学ぶ。東京大学や国際基督教大学などはリベラルアーツ教育を掲げている。一方、本学や日本の多くの大学が2年生までで専門と平行して一般教育を受け終えてしまっている。これでは多くの集団が認識された今では到底足りるものではない。

しかし、本学以外の多くの日本の大学では自主ゼミというゼミがある。それは学生が自ら講師を呼んで講義を呼んでもらうというゼミである。自主ゼミは大学が設置した科目以外で学生が学ぶことができる。話題になつてくる事柄や興味のある事柄について学ぶことができる。学年が上がるごとに忙しくなつて、一人の市民として、貪欲に一般科目を取つてみてはどうだろうか。また、本学にも自主ゼミを作つてみてはどうだろうか。